

令和元年度第2回小田原市総合教育会議 会議録

1 日時 令和2年2月7日(金)午前9時～午前11時00分
場所 小田原市役所3階 全員協議会室

2 出席者の氏名

加藤 憲一(市長)
栢 沼 行 雄(教育長)
和田 重 宏(教育長職務代理者)
吉 田 眞 理(教育委員)
益 田 麻衣子(教育委員)

3 欠席者の氏名

森 本 浩 司(教育委員)

4 説明等のため出席した職員の氏名

理事・教育部長	内 田 里 美
子ども青少年部長	北 村 洋 子
教育部副部長	友 部 誠 人
子ども青少年部副部長	中津川 英 二
教育総務課長	飯 田 義 一
学校安全課長	鈴 木 一 彰
教育指導課長	石 井 美佐子
教職員担当課長	鈴 木 一 彦
教育指導課指導・相談担当課長	大須賀 剛
教育指導課指導主事	楠 喜久子
地域政策課長	府 川 悟 志
子育て政策課長	山 下 龍太郎
青少年課長	吉 野 る み
学校安全課副課長	高 田 恭 成
学校安全課副課長(保健係長事務取扱)	鈴 木 富 子
学校安全課副課長(学校施設係長事務取扱)	中津川 博 之
教育指導課副課長(学事係長事務取扱)	齋 藤 吉 弘
青少年課副課長	淵 上 洋 光
教育総務課係長	深 井 孝 洋
健康づくり課係長	吉 川 由紀子

(事務局)

教育総務課副課長 府 川 雅 彦

教育部副部長… 定刻となりましたので、ただ今から、令和元年度第2回小田原市総合教育会議を始めさせていただきます。

本日の司会を務めさせていただきます教育部副部長の友部でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。

それでは、早速、会議に入らせていただきますが、森本教育委員につきましては本日欠席となっておりますので、御承知おきください。

初めに、加藤市長から御挨拶を申し上げます。

加藤市長… 本日は早い時間から御参集いただきましてありがとうございます。

令和2年が幕開けいたしましたけれども、非常に暖かい冬でありまして、農作物が出来すぎていて三浦市は大根を廃棄しているということでございますが、そのような中で「新型コロナウイルス」の感染が中国本土を中心に広がっていることから我々も非常に懸念をしております。

本市でも、昨日、委員長を加部副市長とした「感染症等危機管理対策会議」を設置して、全部局長が参加をして庁内への情報共有、市民へ情報提供や感染症対策等の基本的な考え方を取りまとめて方針決定をして、今後の状況の推移に対応していくということで動いているところでございます。あまり重篤化しているケースが国内にはないので、そんなにバタバタすることなく応じていきたいと思っておりますけれども、慎重に見守っていきたいと思っております。

学校のほうについてもインフルエンザによる学級閉鎖等も例年に比べて多いかというはまだそんなでもないですが、数校出ておりますので例年どおりしっかりと取り組んでいきたいと思っております。

さて、今日のテーマにも絡んでくるのですが、令和2年度の当初予算の予算案がほぼ固まりまして、17日から本会議があり、その後予算審査をしていきますけれども、この中で皆様に御心配いただいております本市の教育現場に対するいろいろな財政的な加配といいますか、それもいくつか盛り込んでいきたいと思っております。今日も議論に出てきます放課後の子供の居場所に関わる部分では、放課後子ども教室の在り方に関して。また、老朽化が進んでいる学校施設等についてはその維持修繕等について。また、多忙化が非常に厳しい状況にある教職員のサポートするためのいろいろな手当についても盛り込んでおりますので、こういったことをしながら本市の教育体制の強化に取り組んでいきたいと思っておりますので、是非また御関心を持っていただければと思っております。

また、その中で今日のテーマとなります（仮称）おだわら子ども若者教育支援センターこれは4月にいよいよ開設になってきます。非常に大きな課題領域についてこういう形で拠点を立ててワンストップで対応できる体制が整いますので、これについては開設後の実際のオペレーションが大事になりますから、御専門の観点からは是非御意見を賜りたいと思っておりますので、今日もそ

ういったことにつながる皆さんからの御意見も期待をするところでございます。

三つ目の議題に、前回に引き続いて親世代へのアプローチというものをに入れております。これについては、特に資料等用意しておりませんが、子供の育ちに関わる根本的な部分の議論でありながら行政が立ち入ることが難しい領域ですので、ここについても時間の許す限り御議論させていただければと思います。いずれにいたしましても子供の育ちをめぐる状況はかつてと大きく変わってくる中で時代が非常に難しい局面を迎えてくるわけですので、しっかりとした生きる力と人間力を持った子供たちが小田原から巣立っていくようにこの総合教育会議でもしっかりと議論してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

教育部副部長… ありがとうございます。

それでは、議事に入ります前に、本日お配りしている資料の確認をさせていただきます。

資料は、「次第」、「名簿」と「席次表」が両面で1枚、【資料1-1】A4ヨコ、【資料1-2】A4片面、【資料1-3】A3ヨコのもの、【資料1-4】A4の縦、【資料1-5】みんなのあそび場「こころみルーム」のチラシ、【資料2】A3二つ折り3ページの資料で、資料2につきましては本日卓上で差し替えとさせていただきます。過不足等ございましたら、お申し出ください。

それでは、これから議事に入らせていただきます。議事進行につきましては、加藤市長をお願いいたします。

加藤市長… それでは、限られた時間ですのでしっかり議論していきたいと思っております。

次第に基づき、進めてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

今回のテーマ設定におきましては、既に皆様方に事前に御案内しておりますけれども、令和元年度第1回小田原市総合教育会議での皆さんの発言からキーワードを抽出いたしましてテーマの設定を行ったものでございます。前回、放課後児童クラブや放課後子ども教室、学習機会の提供、そして今般広がっております子供会の休止や担い手不足という発言がございましたので、議題1として「子どもの居場所について」を取り上げることとしたものでございます。本市としても総合計画の重点テーマのひとつに「子どもの多様な居場所の連携と進化」を取り上げておりまして、家庭、学校、地域、行政等がそれぞれの役割の中で、子供たちが安全・安心に過ごせる豊かな育ちの場づくりを進めるために、地域の見守り拠点づくりや、学校を中心とした居場所づくりなどに取り組んでいるところでございます。

今日の資料1-5に益田委員が代表となっておりますNPO法人の取組を御紹介しております。

三の丸小学校区で子どもの居場所の取組を始められたところで、つい先月から始めたばかりでございますが、民間の皆様による取組も活発になって

きているところでございます。

最初に益田委員から事業を始めたきっかけやねらい、概要、また7月27日に開設をされた日の状況などをお話しいただいて少し議論の導入ができればと思っておりますので、益田委員すみませんがよろしく願いいたします。

益田委員… 取り上げていただきありがとうございます。NPO法人「こころみ」では先月の27日からかまぼこ通り古民家においてこころみルームを始めさせていただきました。そもそものきっかけはすごい昔に遡るのですが、私は大学を卒業して就職した先が東京の民間の児童館でした。その時は放課後に子供たちが自由に遊びに来て、自由に帰る場所だったのですけれども、実際子供を産んでみた時に小田原市には児童館がないことにすごくショックを受けまして、子供たちどうするんだろうと思ったのが最初のことでした。一昨年、法人を立ち上げるにあたって何がやりたいかということのを皆で話し合った時にそのことを思い出して、放課後自由に子供たちがいられる場所が欲しいなと思ったので、法人としてこういったことをやっということになったのがそもそもの私の思いのきっかけです。

実際に去年、豊島邸の活用の募集があったときに立ち上げたばかりだったので無理は承知だったのですけれども、豊島邸みたいな所でこういうのができたら良いよねっていう夢物語だったので、それを提出させていただいて、もちろん予算等の問題もありますので、不採用とはなったのですが、それがきっかけでまちづくり交通課の方から一般社団法人全国古民家再生協会さんが古民家を借り受けるので「こころみ」で人を集めることができなにかという話をいただきましてそれで、私たちがやることになったのが今回の「こころみルーム」のきっかけになります。

実際には12月22日にクリスマス会をイベントとしてここで一度やりました。その時はもともと他のイベントに参加している子たちが参加していて、この学区の子たちは誰も来ていない状態でイベントを行いました。1月27日に関しては小田原市教育委員会の後援をいただいて、チラシを作らせていただきまして、三の丸小学校で配っていただきました。実際にやってみて誰も来ないのではないかと正直思っていました。地域に根差しているわけでもないですし、子供会とかも知らなかったのと、雨も降りそうなすごく寒い日だったので、来ないだろうなあとと思って油断していたんですね。そうしたら玄関の前でウロウロしている子がいて、出て行って捕まえて「もしかしてここに来てくれたの」と聞いたら「そう」と言って入ってくれたのが5年生の3人組で、駄菓子置いてあるので、そこで駄菓子を選んで買って、すごく寒かったので「寒いから中で食べていく」と言ったら「中で食べていく」と言って、入って「トランプとかがあるから遊んでいいよ」といったら三人で遊んでいました。あと一年生のお子さんがお母さんに連れられて来てくれて、そこは親御さんと私たちとお話しをしながら子供が遊んでいるとい

う状況でした。

4人でしたけれども、全然関係ないのに来てくれたというのが私たちにしてみたらすごくうれしくて、また来るよという言葉を残して帰っていったので、やってよかったなどは思いました。駄菓子も売ってるよと書いてあるんですが、これは西湘@PPの黒柳さんをお願いして、仕入れさせていただきました。それも市民活動でつながった仲間喜んでやってくれたというそこも新しい出会いがあって、やってよかったなと思っています。現在はそんな感じです。

加藤市長…ありがとうございます。珍しいパターンだと思います。地域の中で子ども食堂ということでもなく、少し離れた場所だけでも商店街の空き店舗、空き家を活用したケースということもあって、非常に我々も注目していますけれども、今のお話の中で皆さん御質問とか御感想も含めて結構ですが、御意見があればお願いします。

和田委員…僕の個人的なことを言えば、子供の居場所というのは民間なんですけれども、ずっと長くやってきた立場から言わせてもらおうと、そもそもやはり居場所の目的って何なのかなっていうと、人のつながりを起こしていくことだと思います。皆さん御存知のとおり、最近、高齢者の引きこもりのデータが国から発表されてなんとその中に専業主婦の引きこもりが相当数いるということが分かりまして、発表されたんですよ。61万3千人のうち12.8パーセントが専業主婦だと。

お母さんがどうして引きこもると非常に疑問に思ったのですが、でもそれをきちんと深く読んでみると、なるほどとうなずける。そもそも社会の仕組みそのものが構造的にどんどんどんどん切れてきている。便利、快適を追求するあまり人のつながりがどんどん切れる方向に行っている。そういうことが見えてくるんですよ。そういう中でこういう試みというのは、とても大事なことだと思うのですよね。ただ、個人の視点から言うと、我々のところは寄宿ですので、広域なんですよ。全国単位で子供たちが行き来しますから、地域で起こすというのは原点だと思うのですよね。人のつながりの原点はやはり地域だと思うので、最近の子供たちに共通しているのは、大人社会の不信感なんですよ。疑っているんですよ。引きこもりの原点も不信感だと思うのです。人間不信から起こっている問題である。ですから、最初、スタートした時は様子見なんですよ。ただ、継続していくことによって警戒心が取れてあそこに行っても大丈夫だよと、そのところまで持っていくことがすごい大変なことだし、それを肯定的に暖かく見守って応援していくということがとても大事なことなんではないかと話を聞かせてもらって思いました。

以上です。

栢沼教育長…益田委員の話を聞いていて、みんなのあそび場の「みんな」は居場所として考える場合には非常に大事なのかなと。例えば児童だけとか、就学前の子だ

けとか、ある特定の対象だけを限定すると、当然そこに居場所がある子とない子がいて、そこに行きたくても自分に制限が加わっているからダメだとかそういうケースが出てくるのかなといった感じがします。

そういった面では対象というのをある面では施設の収容能力の問題があるし、それから誰を対象にするのか、人と場所の関係である程度枠が決めざるを得ないと思うのですが、できる限りみんながこころみルームでもいずれはお母さんも一緒にとか、あるいは地域の方なんかもそういう中で子供をめぐる様々なことが交じり合った居場所というか、そんな居心地のいいところが増えていくと良いのかなと。

場所については、こういった古民家等もありますし、小田原市では空き家というのがいろいろと課題になっています。空き家についても若手の起業家にどんどん進出してもらってまちを活性化するという考えもあるのですが、一方では居場所のスペースとして、NPO法人とかボランティア団体が空き家を上手く活用して地域の居場所づくりの一つにしていくというのがあるのかなとちょっと感じました。

吉田委員…こころみルームを専門職じゃない方たちがやってらっしゃるといのはとても大切なことだと思っていて、今、どんな場所でも支援の仕方が大事とか、子供受け入れるとか、研修みたいなものも行って、そこもすごく大事だと思っているのですが、子供が育っていく環境というのはその人に理想的な関わりとか、心を支える人ばかりではなく、いろいろな方がいるので、こういうところに地域のいろいろな方々が来て、会ったことがないような、ちょっと変わった人とか、そういう方とも子供たちがなんとなく触れ合えて、いろいろな人がいるんだなというのを感じられるような地域の場になると良いなと思います。

ですので、「みんなの」というのは栢沼教育長がおっしゃったみたいな、いろいろな人が来て、地域の方って書いてありますよね、子供に関わったことがない人がどれどれという感じで来てみて、もちろん安全を確保した上でですけども、子供にちょっかい出してみるとか、面白いかなと思いました。

和田委員…将来的にお願いが一つあります。というのは、発達障害とか様々な個性的な特徴を持っている子供たちがたくさんいるではないですか。そういう子も「みんな」の中に入るわけですよね、来るわけですよね、その時にやはりそこに専門的に対応できる人物がいれば、なおのことなんでしょう、それは無理なんだろうと思います。ただ、そういう子が来た時にきちんと繋げられる状況を作っておかないとその子供たちが結局そこに来てもまた差別されたり、排除されたり、いじめに合ったりというようなすごく初歩的な人間関係の問題が処理できないところはやはり居場所とは言えないと思うのです。その点をきちんと将来的に今すぐというのは無理でしょうけど。

それからもう一つとても大事なことは、様々な人たち、子供たちがお互いの存在を肯定的に認め合える空間にしていかなければいけないわけで、ちょ

っと気を許してしまうとずるずると行ってしまいます。ここは、ともかく多様性を共有できる、お互いに存在を肯定的に自分も受け入れられてるんだから、みんなも受けれていこうよというスタンスを堅持していくということは是非居場所の条件だろうと思います。お願いします。

加藤市長… 皆様方の期待が大きいということですので是非よろしく願いいたします。私から一点だけ、万年地区はかまぼこ店の若手経営者とかかまぼこ通り活性化協議会が熱心な活動をされているじゃないですか。夏には万年地区サマーフェスティバルとか、その時は地域の経営者の人たちも総出で出てきますし、あの時は子供がすごい出てくるんですね。そういう地域の活動のベースの部分があるので、そういったところとつながっていくいろいろな可能性はあるだろうなと思っております。お忙しいでしょうけれども御検討を。全体を含めて益田委員のほうから何かお話しがあればお願いします。

益田委員… ここを借りているのが3月末までなのです。このお家は離れなんですけれども、一般社団法人全国古民家再生協会さんがこれからここを使っていくということで、まず社会実験的に人が集まるのかという感じで、子供が集まればそれだけいいよねということで私たちが3月までやるということになっていて、そこから先はまだ決まっていません。NPO法人としても物件等のお金がないので、場所をさまよう感じになるんですけれども、どこであれ継続的にこの事業は続けていきたいなとは思っています。

加藤市長… ありがとうございます。各委員の皆様からも御意見等いただきましたので、形はどうあれこういった働きが地域の中で出てくることは望ましいので、是非よろしく願いいたします。議題1の部分の導入的な意味で益田委員が取り組んでらっしゃる活動を皆さんと共有させていただきましたけれども、ここから(1)の子どもの居場所について議論に入っていきたいと思っております。事前に資料をお渡ししておりますけれども、資料1を御覧いただきたいと思いますが、子どもの居場所づくりに取り組んでおります子ども青少年部と教育部の方でまとめた現在までの取組と今後の方向性についての資料であります。

御承知のとおりかと思いますが、現状としてはまずは学校にまつわる部分としては、放課後児童クラブの存在、また、ここ数年来取組が進んでおります放課後子ども教室、こういったものを合わせて学校での授業終了後の子どもの居場所の整備を進めてきているところであります。

これについては、新年度の予算等でも上げていくのですが、放課後児童クラブにつきましては、いろいろと現状で課題があることから、民間に委託する形で開設時間の拡大ですとか、取組内容の自立を目指していくという方向性を市のほうでは考えているところです。

放課後子ども教室については、今年度ですべての小学校で開設されておりますけれども、ここにはいろいろな意味で地域の大人の方たち、教職員のOBの方たちに参加いただきながらこの取組の内容の充実を図りつつ、可能

なところからこの上の放課後児童クラブとの一体的な運用にスライドさせていこうということで、順次取組を進めているところでありまして、当面は真ん中のところですね、一体的に放課後児童クラブと放課後子ども教室が一体的に運営をされて、子供たちの学校の中での居場所を作っていくということがあります。

下段のほうですね。地域の中での居場所づくりとういことで、スクール・コミュニティという考え方に基きまして地域の中でいろいろな子どもの居場所づくりを地域の大人の方たちに作っていただいたところが現在13地区14箇所で開催がされているに至っております。

また平行してプレイパーク、子供たちが水や火を使ったりしながら屋外の公園等でのびのびと遊べるようなプレイパークを少ないですがやってきておりまして、こういう学校外での居場所づくりの取組を進めてきています。ここに子ども食堂等が加わってきた状況でありまして、これらが当面は各地域にこういった場所が一箇所ずつ欲しいよねということで、益田委員が触れた児童館が小田原市にはありませんが、それを代替するところまではいきませんが、地域の中に子供たちが自由に行き来できるような居場所を作っていく、できるだけそこでのびのびと遊んだり、交流したりしながら育っていく場所を作っていこうと。学校の外側に開設に向けて地域の方を支援していこうという状況です。

大きくこの二つ、学校の中と地域とその両サイドで居場所づくりを進めておりますが、こういったことをさらに今後発展させていながら居場所づくりの充実を図っていききたいというのが現在のところの取組の方向性ですね。子供たちが生活したり活動したりする時間や空間というのは、ここでは収まらないので、自分たちの育った時の姿を思い出すと勝手に集まってどこかその辺でぼくらの頃は田んぼであったり神社であったり公園とか崖地とかにみんなで集まって遊んだりしましたし、そういう隙間的な空間や時間は子供にとっても大切だとういこともありますので、すべてを我々行政、大人たちの目が届く空間に子供を押し込めるつもりはありませんけれども、全体としては子供たちが元気で育っていくような空間を作っていこうということで居場所づくりが進められてきた経緯があります。

こういった状況をふまえて、今後、この小田原として整えていくと言いますか、用意していくと言いますか、配慮していくべき子どもの居場所の在り方について皆さんにお話を伺っていきたくと思います。今日はこの(1)の中では目指すべき子供の居場所の在り方ということと、それを支えていくのには担い手の問題が大きな問題でありまして、担い手の不足をどうやって解消していくのか、また益田委員のようにNPO法人「こころみ」が取り組んでいるケース、あるいは市民の任意の団体が取り組んでいるケースなど、いろいろとありますけれどもそういう担い手の団体が継続して発展していくために小田原市行政として取り組んでいくべきことは何か。この3つに

ついて前半の時間でお話を伺っていきたくと思いますのでよろしくお願
いいたします。

まずは資料1—1等をふまえて小田原市が目指すべき子どもの居場所につ
いての御意見をいただきたいと思います。既存の居場所についての御意見
でも結構ですし、こういった観点が必要ではないかという御意見でも構い
ませんので、皆さんから御発言いただきたいと思いますのでよろしくお願
いいたします。

資料1については本市の教育部と絡みますので、まずは教育長から補足も
含めてお話し伺ってもよろしいでしょうか。

栢沼教育長…子どもの居場所ということでは、基本的には小田原市全体で個々の子供たち
が自分でこの場だ、この場だと選択できるようなもっともっと多様な居
場所を増やしていくということが今後大きい目標なのかなと思っています。
まだまだ限定された居場所であって、学校においては、このような形で放課
後児童クラブあるいは放課後子ども教室、放課後子ども教室も週1回、2回
程度で限られてますし、また、放課後子ども教室の中身も学習プログラムを
核としながらも少し、今は体験とか交流プログラムも入れ込んで遊びの要素
も入れ込んでいる。これらをもっともっと広げていく、充実していくそこに
子供が魅力を持って教室に飛び込んでくる。そんな教室を運営していかないと、
学習塾と変わらないとなるとやはりその居場所が息苦しくなったり、
行きたくなくなったり、場合によっては学校のクラスの子もA君B君の
人間関係の中で、あの子と一緒に嫌だからあの子が教室にいるなら行かない
とかそんな変な人間関係にも影響してきてしまう。

じゃあその行けない行きたくてもいけない子はどこに行くのかなといった
時に駆け込み寺的なそんな場所がもっともっと地域とかいろいろな場所
にある。そういう面では下の段の地域の見守り拠点づくり事業をもっともっ
と広げていかなければいけないし、子ども食堂も広がりつつありますけれ
ども、子ども食堂、食べることだけではなくて、そこに交流とか遊びとかい
ろいろな要素が混じった子ども食堂が展開されつつある。様々なメニュー
が用意されている。そういったところがあらゆる子供たちを包み込んであ
げれるような居場所になっていくのかなという感じがします。

あと、地域全体で何か包み込めるようなそういうネットワークづくりとい
うか、そういうものがあると良いなど。例えば、高校生というのはなかなか
地元にいないので難しいですけれども、居場所を何か作るプランする段階
で高校生なんかと一緒に呼び込んで一緒にプログラムに参加させて企画さ
せる。居場所づくりのプロセスに参加させることで、その子供たちの居場所
になっていくと思うのです。その高校生については、自分の居場所と感じ取る
子もいるんじゃないか。そういう意味で担い手育成というのも一つ子ども
たちを、大人が全部企画運営するのではなくて、子供たちに途中でいいから、
一部でもいいから参加させてるというか、参加型から参画型へというよ

うな自分たちも担い手の一角をやっているんだよみたいな、そこが逆にその子にとったら居場所にもなっていく。そんな中今後いろいろな場面で地域の行事にしても大人がお膳立てしてさあどうぞではなくて、そこに子供たちを作る段階からプロセスに参加させる。そこに担い手がいずれは増えていくのかなという感じがします。

以上です。

加藤市長… ありがとうございます。多様に選択できるということは開催の頻度とか内容についてはまだまだ高めていく余地が大きいのではないかというお話がありました。この後担い手の部分についても踏み込んでいただきましたので、これは後ほど他の方たちの御意見をふまえてもう少し深めていただきたいと思います。ネットワークづくりの活動団体の今後の大きな課題でもあると思います。もう少しまた別途意見交換したいと思いますのでよろしくお願ひします。

吉田委員… 子どもが選択できるというのは本当に必要だと思うのですが、例えばこの放課後児童クラブも自分が行っている小学校だけではなくて、別の学校の児童クラブも選択できるとか。民間事業者に委託しますと、その事業者の色が出てくると思うので、自分の子にはこっちのほうが合うんじゃないかとか出てくるかもしれないというふうに思います。それから、放課後子ども教室と放課後児童クラブが一体的に運営するというのは国のほうの方針ですが、それについて放課後児童クラブのサイドからは子供の居場所と言っても、放課後子ども教室と放課後児童クラブと違う目的の元にできたもの。子供の放課後だからといって一緒くたにしてしまうと大変乱暴だという話もあって、帰っても親がいないからそこで過ごさざるを得ない子供たちがそこで安全と安心を得てゆったり過ごして休むというか、体調が多少悪い時には横になれるようなそんな場所であるはずの場所が子ども教室で一緒になることで何かをしなくてはならない場所となってしまうのは大変困るということも聞いておりますので、そういうことに配慮しながら一体化を進めていただければいいのかなと思います。また、大人でも子どもでも一日中集団にいるのはとても疲れると思うのです。発達障害の診断が出た子、グレーゾーンの子や小さな集団を選びたいお子さんはたくさんいると思うのです。そのような子にとっては集団の場が大変つらい場になることもあるかと思いますが、例えば集団の場だけではなくて、地域の中に家庭でファミリー・サポート・センターみたいな形で、御家庭で放課後の小学生をその子の拠点になってもいいよということがあればマッチングできて、その子が放課後児童クラブではなくてお家に帰る代わりにそのお宅に帰ってランドセルを置いて宿題やおやつを食べてお友達の家に行けるとか、そういう感じの活動ができるとすごく良いと思いますし、高齢者の方でお家にずっといますよという方がそういう役割を果たしてくださると意図的にネットワークがつかなくても自然と顔がつながる関係になっていくのかなと思います。ファ

ミリー・サポート・センター事業なんかも子供を保育に預けるということと、地域でネットワークを作るといった二つの柱があったと思います。小田原市では上手く機能しているかもしれませんが、地域によっては預かるだけで会員登録やめたら関係ないよということになってしまうところもあるのですが、そういうのではなくて、ファミリー・サポート・センターとか同じシステムの中で子供とつながったというところで、親とのつながり、親の友達とのつながり、子供の友達ともつながり、地域の中で子供とか親を見守る多世代の多様な目が育つきっかけになるような地域の中に里親的な御家庭をもう一つ持てるようなそういうシステムみたいのがあったら意図的なネットワークよりももっと人の関係に踏み入るようなことができると思うのです。ファミリー・サポートなんかもちょっと一番初期に研究対象にしていたので、話を聞いてみると、小さい時に預かっていたお子さんが大きくなっていくのを見守ったり、運動会とかピアノの発表会とかで呼んでもらっていてそこから人間関係ができて、地域で孤立していた支援者のほうが、友達がたくさんできましたという話もいっぱいあるのです。そんな形で子供を通じていろいろな開拓ができるという機会があるのかなと思いますので、どこかで集団で集めてするサービス以外の展開を考えてみるのもおもしろいかなと思います。

加藤市長… ありがとうございます。貴重な御意見だと思いました。小田原市では地域コミュニティの取組の充実を目指していますが、昔は家に真っ直ぐ帰らないで、帰ってもすぐにどこかに行ってしまう仲良しのお友達の家でしたり、優しいおじさんお婆さんの家に行ったことはよくありましたよね。それは、言われなくてもそういうことをしてた、地域の中にもあったのですけれども、もう一度そういう地域の中でいろいろな大人が子供たちに関わっていく仕組みとか文化そのものを大事にすべきということはこの資料1—1の外側に広がっていく可能性の話として地域サイドでも考えていく必要があるテーマだと思います。

益田委員… 放課後子ども教室に関しては宿題をやってくれるということで保護者の方は行かせたいと思う要素があるのかなと最初の頃はそう思ったので、保護者は行かせたくても子供としては学校終わった後にまた勉強するのは嫌だと言って辞めてしまう子がいるという話も聞きましたし、実際やはり学校の中ですべて完結するというのは、朝学校に行って、放課後までずっと学校にいるということに対して、やらなければいけない施策だとは思っておりますけれども、私としては、ちょっとずっと学校にいるのは朝から放課後まで人間関係も引きずるということなので、そこでうまくいっていない子供たちはずっとお家に帰るまでそれを引きずらなければならないということがあるので、ちょっと開放してあげたいなという気持ちも正直あります。一体化していく時に考えていただきたいのは、子どもは何をしたいのか。子供は自分が今何をしたいのか。何をするのかを決定できる場所であってほし

いなどと思います。大人が今日はこれやるんだよとか、こうだよあだよというのではなくて、放課後っていうのも市長がおっしゃるように昔は自分が友達の家に行ったり、おばさんの家に行ったりと自分がそれをしたいからやっていたことであって、子供の自己肯定感を上げるには自分が何をしたいのか。どうやって達成したかというのが一番大切であると思いますので、そういうのを大切にしたい場所にしてほしいなと思います。

余談ですけども、昨年うちの息子が大学のゼミの大会があつて、その時にテーマにしたのがまさにこれだったのです。学童と放課後子ども教室をどうやって一体化させていくかというのをテーマにゼミでプレゼンをしたんです。その中身をちょっと見せてもらったのですが、大学生が5、6人で考えたんですけど、大学生が考えることなので結構奇抜なことを考えているんですよ。こんなこと絶対行政ではできないような。でも、大学生とか高校生とか教育長もおっしゃるように柔軟な発想を私たち大人ではない子たちにやってもらおうというのもすごくおもしろいなと思って、その時のプレゼンはどこかの市町村がおもしろいからうちでやらないかっていう話があつたくらい面白いプレゼンだったので、柔軟な考えを持った運営をしてもらいたいと思います。

加藤市長… 子供は歳の近い世代からより強く影響を受けますしね。私も自分の経験から、そう思います。歳の離れたお父さん、お母さん世代よりはお兄ちゃんお姉ちゃん世代のほうがより影響力がありますし。そういう意味では教育長からもお話しがありましたけれども、担い手の確保と場の充実という意味では非常にありうるというか大事な発想だなと思うのですよね。

益田委員の息子さんの発表を是非聞いてみたいですね。

和田委員… 放課後児童クラブと放課後子ども教室というのは委員の皆さんから御意見いただいて、これは英知を結集して上手く移行していくということは方向性としては間違いではないのかなとは思いますが。ただ、多くはシステムから抜け落ちちゃう子っているんじゃないかなというのをちょっと心配しています。

数日前にも県の教育委員会で学習会があつたのですけれども、今、不登校の子供たちって急増しているんです。全国で一万人前後くらいずつ増えてきている。これはいったい何なんだろうというのが数年前から議論されているのですけれども、これひとり親とすごく関連しているとも言われています。というのは、それ以前に学校の登校支援の段階で繋ぎとめてくれたらいいんだけど、行きたくなくなっちゃった場合に結局、ひとり親、特に母子家庭が多いそうなんですけど、子供ひとりを置いていかざるをえない。何を言いたいかという、午前中が抜け落ちている感じがするんですよ。ただ、例えば小田原市の場合であると、不登校の子供は教育相談指導学級しろやま教室・マロニエ教室があるじゃないっておっしゃるんだろうけど、そこに行きたがらない子もいるわけですよ。数で言ったら相当数ですよ。運営の在り

方というのも議論しなくてはいけないテーマではあると思いますけれども、同時にそこにこぼれちゃっている子供たちがいて、それが家庭の事情でどうしても生活のためにはお母さんが仕事に行かなければいけない。そうすると子供が一人で家に置かれる。核家族ですから、おじいさんおばあさんもいなかったりで、そういう状態がどうも増えているんじゃないかというふうに言われていて、この問題もやはりちょっと子供の居場所というくくりの中で検討していかなければいけない問題なのかなということをおもいます。それが一つ。

もう一つは、実は高校生世代の支援というのも今神奈川県でやっています。ここに資料も持っていますから後で配っていただければと思いますが、これが何かって言うと、やはり高校生世代の子供たちも人間関係切れているのですよね。そういうのを改善していこうということで、カフェをやっているのですよね。県立高校の中で教員でない地域の人達が、ある時間カフェを開く。案外効果があるんですよ。先生たちにはあんまり心の内は言わないんですけど、飲み食いというのが入るからかもしれないけれど、非常にフランクに彼らの心のうちを明かしてくれるという。この地域では小田原高等学校にカフェがありますが、そういうことと同時に県立高校がインクルーシブ教育とか、それからクリエイティブスクールとかというふうに結構今までの全日制と定時制だけじゃなく、いろいろな特徴を持ったたぶん今小田原市で考えられている子どもの居場所づくりについてと同じような意味でつながるようにいかにして作っていくかということをおもいます。そういうところとも連携をしていくということが必要なんじゃないかとおもいます。

たまたま小田原市内ではインクルーシブ教育実践推進校もクリエイティブスクールもないんですね。足柄高等学校はインクルーシブ教育実践推進校ですし、大井高等学校はクリエイティブスクールなんですけど、でも、市内の子供たちは足柄高等学校にも大井高等学校にも通っているわけです。市内の子供たちはこういう高校の教育との連携というような視点も入れながらこういう居場所って問題を考えていく必要があるんじゃないかとそんなことを感じました。一つは小田原市の生活支援課の中で生活困窮者自立支援法に基づいた学習支援を数年前からやらせてもらっていますが、やはり国は学習支援によって貧困から抜けるということを狙っているんですけども、どうも学習だけでそういうことが実現するとはここ3、4年やってみてちょっと難しいなというふうに感じています。で、これこそやはり子ども食堂と同じように居場所的要素を相当強く入れていかないと、やはり子供たちが喜んで来ないんですよ。勉強勉強勉強だと参加者がだんだん少なくなっていく。勉強でそういう状態から抜けさせていくというのは、一つの方法ではあるかもしれないけれどもすべてのことの解決には至らないということをおもっています。

加藤市長… ありがとうございます。和田委員がおっしゃったこのシステムから抜け落ちてしまう子達の受け皿についての話がありましたけれども、それは、例えばこんなことをではないかみたいなそういうヒントみたいなものはありますか。地域のほうで具体的にやっていくとしたら。

和田委員… 三番目の親世代へのアプローチともものすごく関連があると思うのです。子供だけを抜き取って何とかするというようなことではなかなか特に抜け落ちている子供たちの問題というのは、上手いいかないかなあというふうに思います。

ただ、課題としては、重要な課題で、そこも含めた行政側の対応というのは必要だろうと。これが決め手というようなアイデアがなくて申し訳ないですが。

加藤市長… 一つ目の子どもの居場所についての御意見、それに発生する形でこの後話していただくテーマについても挙げていただきましたのでありがとうございます。

大事な御指摘もありましたので、是非こういったことをふまえて子どもの居場所、行政が考えていく居場所、民間にやっただく場所それぞれの内容の充実につなげていければと思います。ひとまずこのテーマについては以上とさせていただきます。

次に先ほどもお話しが出ていましたけれどもこういった居場所を支えていく担い手問題、担い手不足だったり、担い手の偏りだったり、そういった問題が今既に子ども教室等でも学習支援をやっただく方の人材確保等足らなくなってきたことも聞いておりますし、まだまだ地域の方に参加いただいていることもありますし、先ほどの中高生の話もありましたが、このあたりについて担い手不足の解消に向けた何か皆様方からの御意見等があればお聞きしたいと思いますがいかがでしょうか。

栢沼教育長… 学校教育の立場から思うことは、現在、小中学校では実際には総合的な学習の時間等で実施されている各市の体験活動が非常に今後の担い手に当然将来的にはつながっていくものとして現場では頑張っただけでやっている、職場見学とか職場体験とか職場実習とか、この前も矢作小学校で、小田原ダイナシティやイトーヨーカドー小田原店のほうで実際に子供たちが売り場とかいろいろな場所で体験をしてきている。記事にも載ってましたけれども、そういった各種の職場見学、職場体験、職場実習というのがいわゆるキャリア教育とする将来の担い手につながっていく。これは現場のほうではやってもらっているところですが、さらに今後は先ほどから申し上げたように地域行事等に関して自治会とかまちづくり委員会等にもできるだけ今後はいろいろな形をお願いしたいなと思っているのは、子供たちの参加型を大人が作ってさあいらっしゃいではなくて、そこに何か子供たちのつけ入る余地があれば子供たち何人か中学生とか小学生高学年でもいいし、高校生でもいいし、そういった人たちをその企画の段階から参加させてある企画

を任せるとか、作ってみるとか、提案してみるとかそんなことが今後いろいろな地域のイベントとか行事の中で行われていると現に健民祭は中学生が役員を担っていたりというところもありますけれども、これも結局大人がお膳立てして子供に学校にお願いする立場なんで、そうではなくて、例えば、健民祭来年どうしようか言った時にそこに中学生とか小学生の何人か入れてそして一緒になって考えて行くというそんなところの参加型から参画型への転換というのが、今の子供たちにとっては将来的に担い手になっていく場かなとは思いますが。そこで、大人からいいぞとか褒められたり認められたり自分がやったことが実現できたりするとそこに有用感が生まれて将来地域の中でいろいろな場ががんばってやろうという担い手の一端になっていくのかなとそんな具体的には分かりませんが、自分ごととして子供たちが捉えるような、お膳立てを大人がしかけてあげることが大事なのかなと。

加藤市長… 将来的な地域の担い手の育成につなげていく意味でも職場教育ですとか地域行事の参画ということが、大事ではないかというお話だったと思いました。

吉田委員… 市長が進めてらっしゃる小田原市民学校、たくさんの市民の方が参加されているというのは、これからの担い手というところで明るい兆しかなあと思いますので、卒業生が具体的にただ勉強したじゃなくて、担い手となって活動してくれるようにとか、あと、同じ人ばかりで同じ顔が出てくるのではなくて、初めて活動する方が見ているのではなくて、活動の流れに乗って行って、自信をつけて担い手として育ててくださるといいのかなあと思ったりします。やはりみんな仕事を持っているというところで、退職された方は少しお時間もおありでしょうけれども、高齢者も多いですね。市民学校は。でもだんだんに70歳まで働けとか言われてますし、労働する期間が長くなりますので、やはり自分が仕事を持っていても一部の時間は地域のために使うという生活スタイルが身に付いた人がたくさんいるといいなと思うのです。仕事しているからできませんではなくて、仕事していても一部自分の暮らしのなかでやるということが生き方として自分自身のためにもいいし、子供のためにもいいし、より暮らしやすくなっていくんだということ。ですので、子供に対するキャリア教育についても、どんな仕事につきましよう。仕事やめずに頑張りましようだけではなくて、自分がキャリア形成する中で無償の活動、お金を得るために働くだけではなくて自分の力が生きるという場は貨幣価値以外のところにもあって、そういう働き方がとても大切ということも子供たちにも教えたいし、大人の社会の中でも働き方改革の中でただ労働時間だけで改革しようではなくて、お金の換算できる労働以外の労働という活動もしてみましようなど。益田委員も、私もそういう活動いっぱいしてきましたが、そういうことによってとても自分自身が広がりますし、人間関係も広がるし、大変なことも多くてお金ももらわないでこんな大変なことしてるのと自分のことをちょっと反省する時もあるんですが、やはりやってよかった

などか、もっと頑張りたいなという気持ちになって自分を支える根っこになっていくんですね。そういうところも働きながら得ていくと、退職した後も空しくない人生でもありますし、自分が生きていくことの両輪が有償の労働と無償の活動、そんな形で人育てをしていくと良いのかなと思います、そういうことが本当に自分自身のためにもなるし、地域とか社会のためにも大きな力になっていきますので、是非そういうメッセージを地域から行政から教育現場から出していくと良いのかなと思います。

加藤市長… 国のほうで70歳までの労働を推奨するようになって、これは年金の財源確保ということで魂胆が透けてみえているのですが、逆に地域のほうに出てきていただく方の年齢が非常に引きあがってしまうことを私は懸念をしているのです。吉田委員おっしゃるように、仕事もするけれどもそれ以外の時間で地域にきちんとご自分の思いを実践していくことこのライフスタイルというのか価値観というのか、それは本当に大事だと思いますよね。なかなかこれは強制的に義務化することができないんですけれども、そういうカルチャーがある小田原でありたいなと思いますし。これはいろいろな意味でほかの分野も含めたテーマになっていくと思いますし、市民学校は3月7日に最初の卒業式になりますので、一定の人数の方たちは子供を育てることに関心をもって何らかの形で実践者になっていただくきっかけになると思っておりますので、ぜひ我々も期待をしつつ卒業後の様子を見守りながら後押ししていきたいと思っております。また引き続きよろしくお願ひします。

益田委員… 担い手不足は本当に何をやっても自治会をやっても、活動をやっても何をやっても付きまとうことで、吉田委員がおっしゃっていた通りだなと思っていて、これは本当に退職したからでは地域にという人はほぼゼロですし、今実感しているのは、50代、60代方々の地域参画がなかなか出てこない人が多いというところで、やっていてくれている人はずっと長くやって、どんどん歳をとっていつてしまっ、失礼かもしれないですけども、頭も固くなってくるので、それはそれで人生として良いのですけれども、ただ子どもの居場所ということで関わる上でうまくそれが回らないのではないかなと。なので、子供に関わる人たちはそういう方がいてももちろん社会なので良いのですけれどもいろいろな世代の方に関わっていてももらいたいというのは、切実な思いです。子供だけではなくて、常々思っているのですけれども、そこに関わってくる迎えにくる保護者の方とも何でも話せる関係になってもらいたいので、そういうことのできるような担い手探しはすごく難しいですけど、やはり子供のころから先ほどからも言っていたように、キャリア教育の中でやっていくしかないだろうなと時間がかかることだろうなと思うので、担い手不足はどうしたら良いか私も今全然分らないです。

加藤市長… 地域には我々より若い世代で子育て現役世代の方でPTAの経験者とか子供の経験者とかこういう一定のまとまりの層がいるんだけど、そのままスラ

イドしてやっているかというところでもなかつたりして、なかなか難しいですね。

和田委員… 担い手不足は我々の組織でも言えることで、つくづく感じているのですけれどもこれは若者が育たないというのは若者の問題でなくて、もしかしたら蓋をしている我々世代の問題かなと多いに反省すべき事柄ではないかと最近感じているんです。

というのは、我々世代は、ある時代繁栄してきた際に日本を支えてきた人間でもあるのですよね。その成功体験がやたら脳裏に残っていて、若い人たちに対してお前ら何やっているんだという目で何となく見ているような感じがするのです。否定的にみられている相手側からみたら、そんなところで何か言たってしょうがないというような、実は引きこもりの問題を迫及していくとことごとくこれなんです。親がお前何やっているんだという目で見続けているから、否定され続けられているんですよ。彼らは元気にならない。責任もって自分たちのクリエイティブな発言をしない。蓋してしまっている感じがするんですね。担い手不足のことに関しては、舵を切り直さないといけないんじゃないかなと。8050問題は老人の問題から生じた名前なんですけれども、我々は青少年問題から引きこもりからずっとだんだんだんだん年齢があがってきますから、そこでも突き当たる。接点の問題なんですよね8050問題は。老人の問題を抱えてきた方たちが青少年問題から上がってきた引きこもりの問題には、ほとんど実体を御存知ないんですよ。それでやはり老人側に立って、引きこもりの40代、50代の問題言ってるから解決しないよねというそういう状況に今あります。そういうところに呼ばれていって、引きこもり側からの発言をさせていただくということで、ひしひしとこの頃感じているのは、どうも年寄りの側が正しいという論理に基づいているなという感じがするんですよ。これはやはり相当な勢いで時代は変わっているわけだから、時代感覚に即したアイデア、実践というものは必ず彼らのほうがあるわけですよ。僕なんか時代遅れでひしひしと感じています。益田委員がおっしゃったようにやはり年齢を重ねた人たちの存在も価値があることではあるかもしれないけど、でも、できるだけ控え目に若い人たちを主に考えるようなそういう社会づくりにしていかなければならないのかなと思います。若者の就労支援のところでも今まではとにかく収入を得てこいがイコール自立だったのです。厚労省もこの頃変わってきているんです。その狭い定義の中で自立を考えるのはよしましょう。自立って多様な自立の仕方がある。その中で一つ言えるのは、大体自立なんかしている人間は一人もいないのではないのでしょうか。僕も含めて他立ですよ。今日も9時の会議があるからこの時間に合わせて来たんで、僕が決めたわけでも何でもなくて、皆さんが決めてくれたやつに乗かってたぶんそうやって多くの人たちがやっているんだろう。他立の状態を前提として受け入れることができる人間が自立している。自立自立というのは俺が俺がと

いうそればかりを主張するようなことってこの頃言わなくなってきた。厚労省もだいぶ変わってきています。ぜひこれからの担い手不足のことを考えるにあたっては、若い人たちが建設的に自由に開放的な気持ちで提案できる社会づくりっていうことを実現していくことがこういう変わり目の時代に一番大切なこと。明治維新のように武力を持って前の社会をぶっ壊すは乱暴で、そんなことはあり得ないことだし、それは否定しなくてはいけないことだと思うけど、若い人たちの時代感覚でモノが言える、やれるこういう社会が実現できたら僕らのなかでなかなか自立できない人たちが親子間で対等で話ができるっていう状態になるのにはどうしても若い人たちが実力をつけないと対等な話し合いになってこないんですよね。だから実力がつくという生きていける力とか問題解決できる力とかを普段の活動の中で蓄積できるような仕組みもすごく重要なことではないかと日ごろ感じています。

加藤市長…裾野が広い話になったので、咀嚼して受け止めて行きたいと思います。私も少し意見申し上げますと冒頭、教育長おっしゃったように地域への行事に若い人たち、子供たちが参加をして企画をしていくという話がありましたが、子供会も役員のみならず手不足で休会に追い込まれている状況なんです。和田委員のお話しにあるように、特定の方たちが担いすぎてきた面があるかもしれないということ、そういう構造の見方を変えていくということができてこなかったんじゃないかと思えます。

一方で、益田委員の仲間の中には40代とかもっと若い世代でバリバリ仕事をしている子育て世代の人たちもいるんだと思いますけれども、逆にそういった方々、今の和田委員の話ではないですが、いろいろとヒントをもらったり、こういう活動ならできるんじゃないのとか、こういった形で地域の働く場所であったり活動の場所であったりというようなアイデアがもっと出てくるんじゃないかという気もするのです。何かの団体の役員をやって頂戴とかこの活動の場に来てもらって支えてくれというのは難しいけどそこに子供たちを含んでほしいとか、ということはあるんじゃないかなという気はするんですよね、子供会の活動の中で例えば農業体験もさせたいといった時にお母さんたちが畑に行って耕すのではなくて、作業されているおじいちゃんのところへ子供たちが行って学べば、それでいいわけですから、地域が持っている育ちにつながる場をみんなが開きあっていくと、もっとも担い手の問題の直接的な解決にならないかもしれませんが、子供が居場所として育っていくような場所の拡大というのは、できるのではないかなという思いは持っているんで、地域サイドあるいは、地域でお仕事をされている方々とのコミュニケーションが非常に重要になると思っています。そんなアプローチも少ししていくべきだなと思っています。それは放課後子ども教室の体験のバリエーションの拡大にもなるでしょうし、担い手の拡大にもなっていくのではないかなと思っていますので、そうい

うアプローチも是非していきたいな、地域の方たちにはそういうアプローチをしていきたいなと思います。

このテーマについては今いった話を含めて検討していきたいと思います。最後に居場所に関してだけもう一点だけ。そういった活動に取り組んでらっしゃる地域やNPO法人の取組が今後継続安定していくために、行政が追加的に取り組んでいくべきことがあれば御意見をいただきたいと思えます。

資料を事前にお送りさせていただいておりますけれども子ども食堂これについては、開設において必要な初期の費用、運営についての運営費の費用の一部を行政のほうからバックアップさせる仕組みを既にスタートさせておりまして、現在、開設している箇所数も少しずつ増えてますけれども、そういったことですか、いろいろな意味での便宜を図ったり、食材の確保において協力したり、いろいろなテーマはあるはずです。そういったような支援の仕方、行政としてもっとこういうことをやっていけば活動づくり、居場所づくりを担っている方たちが継続して取組んでいることにつながっていくのではないかとということで少し御意見等あればお伺いいたします。

和田委員… 子ども食堂というのは最初のスタートの時は生活困窮の子供たちに対する食事サービスという概念が第一にあったと思うのです。やってみたらそれは上手くいかないということで、今のような地域のコミュニティの中でどなたでも来て、年齢を問わずというような形で変化していったと思うのです。県内の様々な子ども食堂というのを見せてもらっています。元気なところもあれば、しほみそうだなというところもあれば、それぞれ課題を抱えているようなところがあったりもします。やはり例えばそういう食糧を調達するという場合に、主催している人たちの個人的な関係で農家さんからいただいたり、賞味期限の近くなったものを商店からもらったりというようなことをやっていますよね。結構やはり個人の人脈に頼っている部分が結構あって、これなんとか行政として困っているところにはこういうふうな団体からもらえますよとか情報を共有できる拠点というのが行政側にあったらより立ち上げをしようと思っている人にとってはハードルが低くなるのかなと感じています。

加藤市長… 私もいくつもの子ども食堂の立ち上げの経緯等の様子は承知しておりますけれども、主催している方がいろいろな意味で時間や費用も持ち出しをして立ち上げているケースもよくありますよね。当初非常に苦労されているというのを見ておりますので。今おっしゃったところも大事な点かなと思います。そのほかどうでしょうか。

吉田委員… 子ども食堂につきましては、ボランティア活動を学生たちにできたらということで、行政から説明に来てくださって始まっているところです。こういう形で行政のほうでこういう活動があるのでこういうお手伝いができますよと学校にいる学生たち、高校生でもできると思うのですが、そういうところ

に出向いて説明されていらっしゃると思うのですが、そういうことをもっともっとしていくと具体的なイメージも沸いて自分の力が活きる場所があるとわかってボランティアさんの獲得にもつながるのかなと思いますし、お子さん達にとって、高校生とか短大生とかそこに行くっていい刺激になると思いますのでお互いに勉強になりますから是非こういう説明にいらっしゃるというのをどんどん進めて続けていただきたいなと思います。

加藤市長…是非お願いいたします。開設時間が夕方とかになってしまいがちですがけれども、学生さんたちができるだけ関わっていただけると、必ず勉強にもなりますし。

吉田委員…私の場合は保育学科については活躍の場があって施設とかかでボランティア活動をさせていただいているんですけども食物栄養学科がボランティア活動を始めるにあたって、はてと思った時に子ども食堂が丁度よくて、学生たちもとても興味を持って関わろうとしておりますのでよろしく願いいたします。

加藤市長…さっそく是非仕組みとか関わりを実験的にでも始めていただきたいところですよ。

益田委員…こころみルームをやるにあたって、ここはキッチンがないんです。食事とかの提供ができない。食べ物を通じるとみんなが仲良くなるというのがあるので、そこが残念だねという話をしていたのです。子ども食堂とても良い取組だと思うのですが、私がやってみて思うのは、一個の団体での広報力には限度がありますので、そこは行政のほうで広報を手伝ってあげるとというのが、行政として一番できることではないかなと思いますのでよろしく願いいたします。

加藤市長…広報等でも最近子ども食堂の一覧の紹介を初めてますけれどももう少ししっかりと各食堂の情報とかも含めた発信をしていったほうがいいですよ。

和田委員…この間、大井高等学校に行ったところ、一町一校ということで、高校と連携しやすいと言ってました。様々な街の行事に大井高等学校の生徒が参加しているのです。例えばみかんのもぎ手のいないところへ行ったり、それから新宿に大井町でできたものを売りに行ったり色々やっていたんですよ。高校カフェの時の経験で言うと、高校生たちは大学生だとか若い人たちのところに行くんですよ。おじさんおばさんのところには来てくれない。飲みながら話をしている、小田原市内にはたくさん高校ある中で実は私は小田原高等学校の学校運営協議委員の委員でもあるのですが、なぜだか地域担当にさせられていて、もうちょっと小田原高等学校生が地域に参加できるような仕組み作りができないかということを託されているのです。そういうことから言っても若い人たちの力を地域に還元できるようなシステムとか吉田委員の話聞いてつくづくそんな風に感じました。

加藤市長…ありがとうございます。昔「児童文化部」とかありましたよね。今でもあるのか分かりませんが。そういう高校生がサークル活動の一環としてやっ

ただくと、非常にやることがたくさんあると思うので、そういう提案をしても良いかもしれませんね。毎日毎日のことではなくて、非常に大事な意見だと思いました。

栢沼教育長… 子ども食堂実施一覧の資料1—3を見ていたんですけれども、一番下段に「現在、運営中ではあるが資金的な支援をしていない子ども食堂」ということでスマイル（東富水）が載っていて、一番右側で上のほうは市の資金面での支援内容として地域の見守り拠点づくり事業負担金等助成している中で今後の運営形態をみて判断ということで、実際には活動しているけれども市のほうの支援がされていないというかこの辺は何か基準というか。厳しい基準があるのかどうか。こじんまりでもやりたいというところが手を挙げれば少しでも、台所が欲しいといったら台所を多少補助するとかそういったもう少し柔らかい形でも基準みたいなのをどういう基準か分かりませんが、これが障害になっているとなかなか広がっていかないのかなと高いレベルであると。そのあたりも担当課のほうで検討してもらえると良いかなと思うのですけれども。

加藤市長… 下に少し細かい字で書いてありますけれども、説明があれば。

青少年課長… スマイルチルドレンでございますが、まず地域の見守り拠点づくり事業というのがどういったものを御説明いたしますと、地域に住んでいらっしゃる方々が担い手になっているということ、それから、地域の子供たちを広く対象する。これが大前提でございます。そうした中でスマイルチルドレン代表の鈴木様におかれましては御自身でこういう活動をしたいということで一般社団法人を立ち上げ、取組をなさっていますが、実際には来られるお子さんを限定しておられまして、東富水に限らず広く募集するような形でやっています。らに参加負担金というものを参加に応じていただきたいというようなお話もございました。そうしたところから支援の方を見合わせている状況です。

加藤市長… いくつか重要な切り口がありましたので今後の取組に反映させていきたいと考えます。次の議題に移りたいと思います。議題の（2）（仮称）おだわら子ども若者教育支援センターについてを報告協議として取り上げさせていただきます。支援センターは既にいろいろと御案内させていただきますけれども、乳幼児期から学齢期、また青壮年期に至るまで子供の発達を軸とした各施策の相談や支援を集約いたしまして切れ目ない総合的なサービスを提供するという。全国的にも先進的なあまり例のない取組としてスタートすることとなっております。

センターの概要についてまずは説明させていただきます。

子育て政策課長… それでは、私から、御説明申し上げます。

資料2「（仮称）おだわら子ども若者教育支援センターについて」を御覧ください。名称でございますが行政の手続きがまだ完了していないもので仮称とつけさせていただきますけれども私どもとしては、（仮称）おだわら子ども

若者教育支援センター、愛称として「は一もにい」という名前で運営してまいりたいと思っているところでございます。

はじめに、1の「目的」でございしますが、この施設につきましては、発達面において支援を必要とする児童等が増加している本市の現状を捉え、乳幼児期から学齢期・青壮年期に至るまで、子どもの発達支援を軸に、これまで各施策間や成長段階で連携が十分ではなかった相談・支援機能を集約することにより、教育・保育現場での支援環境の向上を図り、「いのちを大切にする小田原」の実現につなげることを目的として設置するものでございます。

施設につきましては、旧小田原看護専門学校を活用し、教育と福祉の連携、さらには青壮年期までのライフステージに応じた切れ目のない相談・支援体制を構築することを目的とするものでございます。開設については令和2年4月を予定しております。

次に2の「(仮称)おだわら子ども若者教育支援センターの基本的な考え方」について御説明させていただきます。図にお示したように、今現在、ライフステージごとに相談等が別々の場所で行われているというような現状がございします。相談や支援の窓口を一か所に集約することによって、子供たちの成長によって、ライフステージが変わっても相談する場所が同じところのできる。相談場所が変わらないことで、今まで以上に相談しやすい環境となり、相談に対するハードルが下がるものと考えております。

また、相談を受ける行政側も幼稚園、保育所、小中学校や関連部署と連携を図りながら、同じ場所で相談を受けることで、支援の連携、特に就学前後の連携ができるようになって、切れ目のない支援が今まで以上に図れるようにしていくという考えでございします。

次に、「3 施設に集約する相談・支援事業」でございします。

まず現在やっている事業のうちこの施設に移設するものですが(1)の移設のところでは、児童相談、子ども発達相談、早期発達支援事業等、保育所等訪問支援事業、これらは現在子育て政策課で実施している事業でございします。次に、青少年相談センターで実施している青少年相談、教育指導課で実施している就学相談、教育相談、特別支援教育相談(現あおぞら)、教育相談指導学級(しろやま教室)、支援教育事業、日本語指導協力者派遣事業等がございします。

(2)の新たに新設する事業でございします。まず障害児通園施設「つくしんぼ教室」ですが、これは、子育て政策課が所管している事業でございします。現在、幼稚園や保育所等に通いながら、つくしんぼ教室を利用している「併用グループ」と呼ばれているグループの利用希望者が年々増加しておりまして、入園待ちの児童が生じている状況となっております。そこで、おだわら総合医療福祉会館内にある現在のつくしんぼ教室はそのまま生かしまして、新たに併用グループをこの施設内に分園として設置するものでござい

ます。

次に、「中学生を対象とした通級指導教室」ですが、こちらは、教育指導課の所管事業となりまして、近年、コミュニケーション能力に課題のある中学生の増加している傾向がございまして、その生徒さんたちをサポートする場所が小学校まではあるんですけれども中学生になるとなかなかないことで、新たに施設内に設置するものでございます。

また、この施設に対する基本的な考え方として、一番下の米印にあるように、まず移転可能な事業から統合してスタートしまして、将来的にはいろいろな事業をやっている中でこういった事業もここでやっていったほうが良いよねというようなものができましたら順次、機能の拡大や移転等も視野に入れてやっていきたいと思いますというところでございます。

資料の2ページを御覧ください。

今後のスケジュールでございまして、令和2年の4月に開設を目指しているところでございまして、あまり時間がないところでございまして、今年の11月から施設の統合及び駐車場の改修工事を行っておりまして、今年の3月定例会に対して施設設置条例を提出させていただき予定でいるものでございます。

次に、5の施設概要でございまして。

6に位置図をお示ししてございますが、所在地は、小田原市久野字川端195番地1、195番地2小田原市役所の北側約600メートルの場所で、小田急線の足柄駅に行く途中でございます。

敷地面積等につきましては、記載してあるとおりでございまして、(6)駐車場につきましては、敷地内に障害がある方等に御利用いただくための優先駐車場を用意するほか、近隣の民有地をお借りして23台程度置けるの駐車場を別途用意させていただき予定でございまして。

次に7の各階平面図ですが、1階に「つくしんぼ教室」の分園を設置いたしまして、2階に中学校の通級指導教室や「しろやま教室」等を配置します。

3ページを御覧ください

3階には、相談を受けている職員の事務室を配置するほか、ワンフロアものもとは学生さんの学習室になっていたところで、ワンフロアになっておりますので、そこで別々のところではなくて、机を突き合せた形でのそれぞれの相談、別々にやっていた相談を同じところ同じフロアで行っていくという考えのものでございます。4階は現在講堂として設置されているのですが、既存のまま活用していく考えでございまして。

最後になりますが、参考として「妊娠期から青壮年期に至るまでに関連する主な相談・支援機能」を所管部署ごとに表でお示ししてございます。

表中で網掛けしているのが、当支援センターに集約されるまたは新設される相談・支援機能でございまして。

以上で、説明を終わらせていただきます。

- 加藤市長… 説明が終わりましたので、ただいまの説明に対して御質問あるいは(仮称)おだわら子ども若者教育支援センターの今後の運営に向けての御意見等ありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。
- 和田委員… 困っている人がどこに相談していったら良いのかというのが課題ではないですか。まずここに困っている人が来たとします。そこで窓口があって、病院でもありますよね。最初に総合案内というかどこに行ったらいいかわからない場合は、症状を訴えれば、あなたはどこどこですよというような場所ってというのはこの配置図の中でどこに位置するのですか。
- 子育て政策課長… とりあえず施設のほうにつきましては、代表番号がございまして、そこでこういったことを相談したいのだけどもとっていただければ、それぞれ専門の担当者のほうにつながるようにと考えております。
- 和田委員… では、まずは電話をするわけですね。分からない人はここへ。
- 子ども青少年部長… 事務室と申しあげましたけれども、3階のフロアにそちらにございますように子ども相談、教育相談、青少年相談のあるこの階でお受けします。カウンターを設けてそれぞれのもとに表示をいかしまして、ただ同じ空間でそれぞれお受けするという意味合いでございます。
- 和田委員… このインフォメーションが大事だと思うのです。それぞれ課題を抱えているんだけれども、いきなり行っていいのですか。例えば簡単に言えば市立病院だったらかかりつけ医からの紹介状がないとだめなわけではないですか。そういうのではなくて、いきなり困ったんだけどどこに行ったらいいかわからない。とりあえずそこに行こうかという人がここで受けられますよというインフォメーションがあると市民としては助かります。
- 子ども青少年部長… その点につきましても広報おだわらの3月1日号に特集を組ませていただいて、ここで何かそういった困りごとありましたらすべてお受けします。ということをまずは広く周知して、市HP等いろいろな形で関係の機関にも事前に30か所ほど担当者から御説明に伺っておりますので、そういったところからも周知を広げていただくという予定でございます。
- 益田委員… 勉強不足で申し訳ないのですが、中学生を対象とした通級指導教室と教育相談指導学級(しろやま教室)に小学生がいるのは分かっていますが、対象のお子さん達がどのように違うのか。違いを教えてくださいたいです。
- 教育指導課指導主事… 御質問のありました、相談指導学級につきましては、現在なかなか学校に足が向かないようなお子さん達を対象としまして、相談の課程でこういった学級に通うことが本人も保護者も望んでおり、通うことが適切だろう。まずそこに通うことが適切だというふうな判断になった時に現在通っております。通級指導教室につきましては、小学校に現在ありますけれども、あくまでどんな課題があるのかというのを特化したしまして、その課題について、少しでも改善するというところで、プログラムを個々に合わせて組んで、取り組んでいくものでございます。もちろん、その通級指導教室に通ってらっしゃるお子さんの中には学校になかなか足が向きにくいというお子さんも

含まれてはおりますけれども、そういった違いがございます。重なる部分も
ございます。以上です。

教育総務課長… 本日御欠席の森本委員からも御意見頂戴しておりますので、私のほうで代
読させていただきます。(仮称)おだわら子ども若者教育支援センターの開
設にあたりまして、福祉、医療の支援体制の支援体制という意味では市とし
てはアピール宣伝を充分やってほしいということ。また、小田原医師会のほう
にも何かチラシ等配布物があれば提供していただきたい。医師会のほう
では月に1度医療機関に配布物を渡すような機会があるので、そういった
機会を通じて各医療機関にも周知ができるので、ぜひそのような対応
をしてほしいという御意見をいただいております。
以上でございます。

加藤市長… 非常に大事な連携ですので、委員からのお話のとおりそこはしっかりと
お願いしたいと思います。

栢沼教育長… 資料2の一番下段のところに米印で移転可能な事業からスタートし、将来的
には機能の拡大も視野に入れる。4月1日にオープンという中で全部がここ
の各事業がスタートできるということではないということでしょうか。ど
この部分が1日からスタートできるのか。

子育て政策課長… 先ほど御説明させていただきました移設する既存の事業と新設事業につ
きましては、基本的には4月からオープンになります。ただ、それ以外にも何
かここでやったほうが良いということがあればそういったものにつ
きましては、随時移転や新たな事業を行うことについて検討してまいります。と
いう意味でございます。

加藤市長… ここに列挙したものについては4月1日の段階で揃っているけれども、今後
必要があればよそについても移転を考えているとういことですね。

吉田委員… お子さんのことについて集約されているということで、事務室も一緒に、連
携も取れるのかなと思うのですがお子さんの問題で家庭の中にその根っ
こがあることがすごく多いのですよね。その場合に家庭の相談にはどんなふう
につなげていくのか。とういことを教えてください。

子育て政策課長… 家庭の相談については、主に児童相談という部署が受けているところが多い
のですが、またそこが児童相談所等と連携を図りながら支援等行っている
ところがございます。児童相談の部署もこちらの部署に移りまして、今までど
おり児童相談所等との連携はきちんと図っていきましょうという形で現在、
調整をしているところがございます。
以上でございます。

加藤市長… あと2月を切っているので、設備的な追い込みもされているでしょうけれど
も、今御指摘がありました、ここを必要とされているお子さんや親御さん
がしっかりサービスを受けられるようにその辺の御案内は改めてしっかり
確認していただきたいと思います。また、これまでばらばらであった教育部
子ども青少年部の連携も大事になっておりますので、内部で調整していただ

いていると思っておりますけれども、そちらのほうもくれぐれもよろしくお願いたします。何かあれば随時この場でも取り上げていければと思いますのでよろしくお願いたします。あまり踏み込んだ議論はできないかと思いますが、3点目の行政・学校・地域からの親世代へのアプローチについて御意見を伺って場合によっては次回以降の会議等でも少し踏み込んだ議論ができればということで、このテーマについては前回も会議の中でもまた今日のお話しの中でも出ていたように子供の育ち、健全育成に関しては家庭の在り方、親の考え方や価値観に関してはそういったものは色濃く反映するものであって、その分行政が直接家庭の在り方ですとか、親の考え方に手を入れにくい部分があるということで、これについてはいろいろな業種の御案内とかあるいは関心のある方は来ていただいて、なかなかお越しいただけない方も多いということと、そういうところで伝わりにくいこちらの思いが子供たちにも届きにくいとか、反映されない課題があって、親世代に対してどういったアプローチをしていけるのか、かなり重要な問題であるということ、私もPTA等子供会の役員をやっている時も思っていましたし、今もまだそういった思いは強いです。自分たちが受けた教育の内容は親になるための教育であったり、人の健全な育ちについての認識であったり、あまり教育されて来なかった思いもありますし、また現在はひとり親家庭も非常に増えていて、先ほどお話し出たように、子供が家庭に一人で取り残されてしまったり十分な愛情や温かい食事というものが毎日毎日出されている家庭ばかりではないということもあって、家庭の状況、親の考え方、生き方というのは必要な要素で、ここになかなかアプローチできていないというのが現在の教育の姿で大きな問題かと思っております、今日は当初事務局からの提案では入っていませんでしたが、私の方でここは大事だから入れといてねということで3つ目に入れてもらった経緯があります。時間が極めて限られておりますが少し皆様方の問題意識等も披瀝していただいて十分に突き詰めることはできないと思いますが次回以降につながる議論が少しできればなと思っています。今私が申し上げた切り口でも結構ですし、また皆さんが親世代家庭の在り方に対して教育行政にアプローチできること、すべきことについてお考えがあればそれぞれ御発言をいただければと思います。

和田委員… 本当に大変な問題なんだろうなというのをつくづく実践を通じて思います。ただ、地域では、やはりどなたも出てきやすいのは防災訓練かな。これほど自然災害が頻発して、環境省の担当者から聞いた話では細長い日本は10年後には全部の地域で災害を受けるだろうなと言っていました。そうしたら私たちの暮らしている地域も今は何でもなくても、明日は我が身。というような状況に置かれるんじゃないかと思うので、これは東北の震災後も防災というところでは自治会、学校も含めて結構進んでいると思いますが、命に係わる問題だからそこを接点にして、そういうふうな世代の親御さんたちに出てきてもらったらいいなと。もう一つ言えるのは、つくづく思うのは人自身が

人という種が絶滅危惧種に入っているのではないかという危機感を感じているんです。昆虫が2050年になると今の90パーセントいなくなる。昆虫がいなくなるとどうなるかという、いろいろな関係を調べてみると、受粉しないのだから作物もできなくなる。というような様々な影響が起こるんだそうですよ。皆さんが記憶にあるかと思いますが、終戦直後男性の精子の数が3億だと言われていたのが、昭和50年初頭で6千万になって5分の1になっているんですよ。生物学的には種が保存されるのに最低限必要な精子ってというのは4000万だと言われていて、もうとっくに超えているんだろうな。ただある時から国は発表しなくなりましたよね。この情報を出さなくなりました。それは国民に心配をさせちゃうからという何らかのことがあってのことだと思いますが、昭和50年初頭で6千万、もちろん平均ですから誰もかれもがってことではないかとは思いますが、それだけずいぶん命に直結するような状況に今人類が陥っている。文明が進んでいるところほど早いそうですよ。このことも含めてそもそも助産師さんに聞くと女性の骨格が変わっちゃってると言ってますね。中学生や高校の最初の頃は骨盤がみんな丸くなるんですって。皆ダイエットをしてしまうから、それによって様々なことが起こっているということも言っているんで、そういう時代にあるんだよということをデータの的に正しく伝えることのできるそういう手法もあっても良いのかなとぼくは感じています。ちょっとなかなか次の親の世代をどうやって引っ張り出すかについては具体的には防災教育が一番の良い角度かなと思っています。

益田委員… 私がやっている団体はまさにそうなんですけれどもPTAを経験して、PTAが楽しかったからそれを続けてその仲間ですべてこの楽しさを今PTA云々言われている時代に保護者の方たちにこういう楽しいつながりもできるんだよということを伝えていきたいところが核になっているんですね。それは子供会をやっていた時にお母さんたちを見ていると楽しければ役員も辞める人もいないし、皆で楽しくやればお母さんたちも出てきてくれるという経験からなんです。とても難しいかもしれませんが、団体でイベントとかすると親子で来てくれる。そこが楽しければまた来てくれる。また友達に広がっていくという地道な努力を積み重ねていくしかないのかなと思います。

だから、学校も行政も地域も疲弊感ではなく、楽しいからやっている精神論なんですけれどもそこを大切にできる施策ができたらいいなと思いますが難しいと思います。

加藤市長… 私がやっていた時に比べると例えば小田原市PTA連絡協議会なんかも雰囲気が変わっていて、みなさん楽しそうですよね。懇親会とか行っても。それはとても良い傾向だと思いますし、学区にいる親世代に伝わっていくというのは大事だと思います。

吉田委員… 先ほど市長がおっしゃった家庭でうまく子供に対応できないとか、家庭生活

が整わないような家庭となりますとあまり出てこなかったりもすると思うのですけれども。PTA なんかも。私なんかの学校で専門の保育のほうではそういう保護者が課題になっていて学ぶ内容として、そういう保護者にどうアプローチをするかという家庭支援がとても科目が増えているんですね。小学校中学校の先生たちがどのくらい勉強されているのかなと思うのですけれども、家庭支援の場合にシステムとかよりも個別対応という保護者にどんな対応してどこかお子さんが行事で出るから見て帰るのではなくて気になっている保護者の方には傍にいて話しかけて話を引き出して相談できる関係に持っていくとか、お子さんの行事とかにたまたま来てくれた時にお子さんが育っている様子全体の中でどの位置かではなく、そのお子さんが前はこうだったので今はこうなっていますという成長の喜びの共有というそこをすごくポイントにして親の心に入り込んで一緒に子供が育つように努力していきましょうとか困ったことがあったら何かできることがあるかもしれないから言ってくださいねというようなつながりを持っていく。個別的に親に関わるスキルとか状況を見てとる目を養うというかそういうことを地道に子供に関わる先生方がしていくというのが一番すごく大事なことなのかなと思っていて保育者にはそれをとっても一生懸命教えろと言われておりますし、私も必要だと思っているので教えていますし、そういう科目も増えてきています。同じことの課題意識で幼稚園教諭保育士の分野とその先の小学校中学校では考え方が違うのかもしれませんが私は小学生になっても個別支援という視点、子供が関わっている人が少し頭に置いておく必要があるのかなと思っています。

加藤市長… 個別支援ですね。ソーシャルワークに近い感じだと思います。家庭支援という教科項目があるということですね。

吉田委員… 家庭支援が保育の場合ソーシャルワークのところから入ったのですけれども家庭支援の心理学という形で心理の視点から親にアプローチしていくそんな形で展開がされています。

栢沼教育長… 非常に感じるのは子育て体験をしてきた先輩というか親たちが繋ぎをしていないのかなと。自分の娘とか御近所の若い人とか。その繋ぎが上手くつながらなくなっちゃったのか。核家族ということもあるかもしれない。そういった子育て関係の世代継承がされないまま、今親世代になっているのかなと一つ感じています。実際に行政からの福祉的なアプローチも含めやっていたらいい。それは主に育児や就労システムに当然親御さんは感謝をしているし、ただ逆にそういう制度があるがために負担感を感じたり責任を感じたりいろいろな面で悩んでる親御さんがいる。そこでもう一つ入っていきたくないと思うのは、同じ問題を抱える当事者同士というの親同士がお互いに安心感をもったり、悩みを聞いてくれたりセルフヘルプサービスのようなサークル的なそういうものが行政から上手く切り口としてできないかなあと感じています。母親たちの場がもっともっと気軽に参加して悩み事

を聞いてもらったり、子育ての悩みの解消をしたり、そういうサークル的なこともあるのでしょうかけれどももう少しゆるい感じでいろいろな地域に御近所にあるそういうところが大事なのかなと感じました。

以上です。

加藤市長… ありがとうございます。子育て世代体験のつながりができていないというのはこの国の現状としてはあると思うのです。家庭構造の変容とか支え合ってきた地域の横のつながりが切れていることもあって、おっしゃる通り悩んでいる親御さん、悩む暇もない生きることには精一杯の御家庭も結構あると思うのです。何か問題に突き当たると考えるんだけど、突き当たらないと考えるということは往々にしてあることなので、難しいところですね。いずれにしても教育長おっしゃったような部分というのは、多かれ少なかれ公式非公式のコミュニティはあると思うのですが、少しサポートしていく施策は必要になるかもしれないと思います。

引き続き今日いただいた御意見等も含めて、今後何らかの形で議論を深める機会があれば、大事なところなので議論していければと思っています。ひとまずは以上のところで、終わらせていただければと思います

次に、3「その他」についてですが、事務局から何かありますでしょうか。

(なし)

加藤市長… 折角の機会ですので、委員の皆様から情報提供なり共有したいことがあれば御発言お願いしたいとおもいますがいかがでしょうか。

(意見等なし)

加藤市長… それでは、以上をもちまして、用意した案件はすべて終了いたしました。進行を事務局にお渡ししたいと思います。

教育部副部長… ありがとうございます。それでは、これもちまして、令和元年度第2回小田原市総合教育会議を終了させていただきます。